



続・日本がつくる剣道具

第三回 日本の名匠たち（前編）

■宮崎県に息づく、剣道防具づくりの魂

現在、国内でつくられる防具のうち、8割以上は宮崎の地で生まれていると言われる。11月3日に行なわれた全日本剣道選手権大会では、多くの選手が日本剣道具製作所製の防具を身にまとい、会場でひときわ強い存在感を放っていた。

宮崎県は古くから「神話の里」として知られ、数々の神々が宿ると伝えられる神話や伝説が今も息づく。その穏やかな風土と人々の手のぬくもりが、この地に根づいた“ものづくりの精神”を育んできた。

地元では“武道具の町”とも呼ばれ、長い年月の中で幾人の名工たちが技を磨き、受け継いできた。一針一打に込められた真摯な想いは、今も全国の剣士たちの体を守り、心を支えている。

剣道が盛んなこの地では、高千穂高校が長く歴史を刻み、近年では日章学園高校の活躍も目覚ましい。剣道の精神と職人の魂が交わる宮崎県こそ、まさに“剣

道防具づくりのふるさと”といえるだろう。数々の名品と呼ばれる剣道防具を生み出してきた背景には100年に渡り受け継がれてきた職人の技と心がある。

その技の根底には、「良いものを正直につくる」という姿勢がある。派手ではなくとも、丈夫で使いやすく、美しさのなかに凛とした強さが宿る——それが宮崎県の剣道防具の特徴だ。道場で汗を流す剣士たちを思い浮かべながら、一針ごとに魂を込める職人たちの姿が、今もこの地にある。静かな山々に囲まれ、川のせせらぎが聞こえる製作所で、今日もまた新たな一針が打たれていく。受け継がれてきた手の記憶が、未來の剣士たちを支える力となる。

今号と次号では、その伝統を守り続ける匠たち――時を超えて息づく“日本の手仕事”に光をあてたい。



案内人 川辺尚彦

(株)日本剣道具製作所代表取締役
（株）全日本武道具代表取締役

培ってきた技と誇りをひとつに重ねた。その結集が、現在の宮崎県の剣道防具づくりを支える“匠の技”へと昇華し、精緻さと美しさを兼ね備えた剣道防具を生み出している。

昭和55年熊本県多良木町に生まれる。
多良木高校卒業後、大学を中退して武道具業界に飛び込む。
25歳で独立し全日本武道具を創業。
平成26年日本剣道具製作所の経営も手がける。
平成29年自社海外工場を設立。
令和元年、内閣総理大臣安倍晋三より首相公邸へ招待を受ける。
世界市場に流通する日本製剣道防具の80%以上を製造。

構成／本誌編集部



伝統を受け継ぐ匠。左から、矢野梢／名匠・湯地幸子直伝。防具製作18年。山下洋二／伝統工芸士・柳本芳明直伝。防具製作33年。新名博文（伝統工芸士）／名工である叔父・新名四十一直伝。防具製作49年。日本剣道具製作所の柱として、半世紀にわたり匠の心と技を受け継ぐ。川辺尚彦／代表者であり「MUGEN」「日向」「ALL JAPAN PITCH」「西都」など、数多くのブランドの礎となる型紙を製作・発案。防具製作26年。三宅洋一（伝統工芸士）／日本剣道具製作所歴代の技を継ぐ継承者。防具製作26年。桃原三枝子／伝統工芸士・鈴木久子直伝。防具製作40年。

■匠の声——伝統工芸士・新名博文氏

「一針に心を込めて」剣道防具づくり49年

日本の伝統工芸として受け継がれてきた剣道防具。その陰には、長い年月をかけて技と心を磨き続ける職人——伝統工芸士たちの姿があります。

今回はそのひとり、宮崎県で半世紀近く防具つくりひと筋に歩んできた伝統工芸士・新名博文氏にお話を伺いました。

——職人の道に入られたきっかけを教えてください。

新名 私は今年で64歳になります。防具をつくり始めて48年になりますね。もともと名人と呼ばれた叔父・新名四十一直伝が「宮崎武道具製作所」を営んでおり、子どもの頃から革の匂いや感触が身近にありました。16歳の頃、正式に弟子入りし、毎日針と糸、革と向き合いながら、ひとつひとつの技を覚えていきました。

——そこから「日本剣道具製作所」へ。

新名 そうなんです。叔父の知り合いでもあった日本剣道具製作所にお世話になりました。防具製作に携わり50年近くになります。すべての工程を手がけることができますが、そのなかでも「面」づくりを専門としています。また、ミシンを分解・組み上げをしたり工場内のすべての器具を管理しています。作業場の音や匂いが、今では生活の一部になっています。

——寸分の違いも許されない世界と伺います。

新名 一番大切なのは、「採寸」です。自分の目で体を見て測ってつくるのが一番確かです。ただ、今は全国から「注文をいただくので、オーダー用紙や写真を見ながら仕立てることも多い。でも長くやっていると、数字を見るだけで「この方はこういう体格で、こう動くんだろうな」と自然に姿が浮かびます。そのイメージを形にしてぴったり合う防具をつくる——それが職人の腕の見せどころです。

——「手でつくる」ことに込める思いとは。

新名 防具は人を守るものですが、ただ形をつくるだけではありません。一本一本の糸を通すときも、「この防具が誰かを守るんだ」と思いながら縫っています。そうしてようやく、心のこもった本物の防具になるんです。

静かに、丁寧に語る新名氏。その言葉には、長い年月を積み重ねてきた職人の重みと、やさしさがにじむ。その手が生み出す防具には、使い手への思いやりと確かな誇りが宿っている。次号は、同じ製作所で新名氏とともに歩んできた職人たちの姿を追う。受け継がれる技と絆、その“ものづくりの現場”にさらに迫っていきたい。